

第4節 コミュニティの役割

第3節において、社会の教育力、すなわち、家庭の教育力と地域の教育力の変遷について検討してきた。インタビューの結果、「(子どもに対して) 許せる範囲も広がってる」、「(子どもに対して) 甘くなったのかな」などの発言が示され、現在の家庭における教育力が昔に比べて低下していることがいることが語られた。また、地域の教育力に関しては、「昔は地域の年寄りがこわかった」、「必ず怒るおじさん (がいた)」などの発言から分かるように、以前は青少年の行動を監視する役割を担う地域の人々の「眼」が存在していたようである。

本節では、逸脱的な行為をなしている若者を見かけた場合、地域の大人が叱れる社会の再構築、すなわち地域の教育力の再生を期待する被調査者の発言を中心に、インタビュー結果を示していきたい。まず第1項では、現在の地域における連帯感が希薄になってきた現状を示す発言についてまとめる。また、第2項においては、第1項をうけ、現在どのようなコミュニティ像が期待されているのかについて焦点を当てる。

第1項 コミュニティの希薄さ

ここでは、若者が地域の行事へ参加しにくくなっている状況や、地域の親同士のつながりが希薄になってきている状況などについて言及し、地域の連携の希薄さに関して語られている個所を呈示する (Scene.4-1~4-4)。

[Scene.4-1] グループ4 (Rは調査者、Sは被調査者の発言を示す：以下同)

S1：でも、地域の催しものに、中高生が入る分野がない。地域の体育祭一つにしたってそう、「種目の中に中高生の参加できるものを作ったらいいでしょ」って、私言ったら、「だって中高生は部活動でいないから…」って言うのよ。地域の体育祭があれば、学校に掛け合ってたって、地域の方が大切だということで、参加できるようにさせればいいと思うのよ。そうしていかないと、中高生が地域に触れ合う機会が全くななくなっちゃう。地域との交流は小学校で終わりってなっちゃう。地域の良さを分かってもらえる場所がなくちゃ、出た子どもたちも帰ってこなくなっちゃう。地域で遊んだ思い出とかなくっちゃ…。地域で

企画したバレーボール大会とかソフトボール大会なんかでも、ほとんど成人者だけでや
てるんじゃない。強制でも何でも、メンバーに中高生を何名か入れるとかしなくち
ゃ。そういう中で、子どもたちは「地域にこういう人たちがいたのか」って触れられるし…。

R：地域の人と触れられる機会がないってゆうのは、大人が地域の子どもたちを把握できる機
会がないってことですか？

S2：そうそう、だから、「どこの子かなあ」ってのが分かんないの。

S1：小学生までは意外に地域と触れ合ってるから、「どこの誰々」てのが分かっているのよ。で
も、中学生になったとたんに全く地域との触れ合いがなくなるから分からなくなっちゃう。

S2：そうそう。

[Scene.4-2] グループ 4

S1：今じゃ、「誰々ちゃんは～」なんて言ったひには、その親が黙ってないからね。本当に注
意できない。

S3：そういうのを克服するのは、隣近所の輪を広げておくしかないのかなと思う。

S1：でも、近所同士どこまで入っていいかも問題だよ。中にはその程度が分からなくてズカズカ
入ってくることもあるし…。でも昔はある程度ズカズカ入ってきてそれはそれでうまくやっ
てたわけで。今の人は馬鹿じゃないから、そういうことはしないんだけど、逆にガードが固す
ぎて、街なんかでは近所付き合いを全くしないらしいし…。

S2：街ね。

[Scene.4-3] グループ 7

S1：自分の子どものことに関しては、必死になるっていう感じなんですかねー。あの一、むか
しーは、そういう風にあの一、周り、隣近所に、どんな子が住んでるかっていうのを、知っ
ていたような気がするんですよー。

S4：えー、みんなー

S3：あら知ってるよねー、今はね、

S4：だって、村中が把握してたんじゃない。

S3：近所の人って、ほんと知らない人っているもんねー。

S4：みんなが。今は一ね。

S1：今は一、います？

S4：今はほら、あの一、近所とかさ一、近くの子一とか、子ども同士もそんな遊ばないからさ。

だから、

S3：遊びも変わっちゃってるしね一。ゲームとかうちん中で遊んでるじゃないね一。

S4：う一ん。親も一、しんない。

S3：子ども見ないもんね一。

S1：外であんまり遊ばないから、あんまり目にすることもない。

S3：遊び自体も変わってるよね。

S4：同級生の、特定の子と遊ぶんでしょ？たしか。ね。

S3：そうだよね一。

S1：えっ、昔は違う、かったんですか？

S4：昔は近所の、う一ん。う一ん。

S3：昔は上も下も関係ないよね。歳はね。う一ん。

S1：あっ、そっか、縦でこう遊んでたんですね一。

[Scene.4-4] グループ7

R：でも、田舎って、結構まだ、わたしのイメージとしては、コミュニティーってゆうか、その、ご近所のつながりとかが、すごく強いついていうイメージが、あるんですが、さっきお話をうかがったときに、それほど強くもないっていうのを聞いて、少し驚いたところは、あったんですけど。

S3：あの頃と、今じゃ全然違うよね。つながり、あるとは言ってもね。

S4：違うよね。

S3：昔のような、つながりはないかね。なにかお祭りがあるときとかね一。

S4：何かの、だから、なに。婦人防火クラブとか、うん。おま、

S3：行事があるときとかね一。そういうときぐらいだよね。うん。

S4：そうね。そういうドライバークラブとか、そういうので、つながってるっていうかね。

S3：そうだね。

S4：普段は、全然ない。

S3：普段はほとんど関係ないよね。まちとおんなじよね。

「地域の催しものに、中高生が入る分野がない。...中高生が地域に触れ合う機会が全くなくなっちゃう。」(Scene.4-1)との発話に見られるように、地域に中学生・高校生を受け入れる態勢がない現状を指摘している。そして、このような地域の体制が若者と地域の住民との距離を広げる原因になっていると語られている。

また、「今は近所の人で、本当に知らない人っている」(Scene.4-3)にあるように、地域にどのような人が住んでいるのかを把握できていない現状が語られた。一方、Scene.4-3では、「昔は、隣近所にどんな子が住んでるかっていうのを知っていたような気がする」と言及され、地域の連帯感が以前に比べて希薄になっていることがうかがえる。そして、「そういうのを克服するのは、隣近所の輪を広げておくしかないのかなと思う」(Scene.4-2)に見られるように、地域のつながりを強化すべきであると認識していることが分かる。